平出遺跡

平成2年度県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1991

塩尻市教育委員会

序

平出遺跡は昭和22年から27年にかけて大規模な発掘調査が行なわれ、縄文時代から平安時代にかけての幾多の貴重な資料が発見され、昭和27年３月には国の史跡に指定された重要遺跡であります。この度、県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区の一環として史跡指定地区に隣接する農道整備が行なわれることになり、工事に先立ち発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は10月16日から11月２日にかけて、天候にも恵まれたことから順調に行なわれ、その結果、数多くの成果をあげることができました。

今回の調査が初期の目的に達し、無事終了できましたことは県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区実行委員会委員長平林実己氏以下役員の方々や地元地権者の方々の深い御理解と御援助によるものであり、また発掘に参加された方々の献身的な御尽力によるものであり、併せてここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

平成３年１月

塩尻市教育委員会

教育長 平 出 友 伯

例 言

1. 本書は、塩尻市教育委員会が長野県松本地方事務所より委託を受けた平成２年度畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区に伴う平出遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は７～３号の道路整備に伴うもので、現場での調査は平成２年10月16日から11月２日まで実施した。
3. 遺物および記録類の整理作業、報告書作成は平出遺跡考古博物館において平成２年11月から平成３年１月まで行なった。
4. 出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館で保管している。

目　　次

第Ⅰ章　調査経過……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査体制……1
　第3節　調査日誌……2
　第4節　遺跡の状況と面積……4

第Ⅱ章　調査結果……5
　第1節　発掘調査場所……5
　第2節　調査概要……6
　第3節　遺構と遺物……10
　　(1) J－24号住居址　(2) H－124号住居址　(3) H－125号住居址
　　(4) H－126号住居址　(5) H－127号住居址　(6) H－128号住居址
　　(7) 1号小竪穴　(8) 2号小竪穴　(9) 3号小竪穴
　　(10) 4号小竪穴　(11) 5号小竪穴　(12) 墓　壙

第Ⅲ章　ま　と　め……23

第Ⅰ章　調査経過

第1節　調査にいたる経過

昭和38年から開始された県営畑地帯総合土地改良事業は、順次工事が進められ昭和47年からは塩尻市地域がその対象地区となり、さらに桔梗ヶ原地区も昭和60年に事業認定され、具体的な工事が進められることになった。折りしもこの事業地域内に、国史跡・平出遺跡が含まれていたことから文化庁、長野県教育委員会の指導により、昭和61年に発掘調査を実施し、その結果を持って事業を進めていく運びとなった。今回の調査箇所は、同事業内の7～3号道路整備に伴うもので、史跡指定地の外側に隣接している箇所である。遺跡の北西隅にあたり、昭和61年に調査された15・29・30トレンチの西側にあり、十分遺跡の範囲に含まれることが予想されるため、工事に先行して発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。

発掘調査計画書（一部のみ記載）

1. 発掘調査地　塩尻市大字宗賀平出
2. 遺跡名　　平出遺跡
3. 発掘調査の目的及び概要　開発事業県営畑地帯総合土地改良事業に先立ち、450㎡以上を発掘調査して記録保存を図る。遺跡における発掘作業は平成2年10月25日までに終了する。調査報告書は平成3年3月20日までに刊行するものとする。
4. 調査の作業日数　発掘作業16日・整理作業8日・合計24日
5. 調査に要する費用　2,000,000円
6. 調査報告書作成部数　300部
7. 発掘調査の主体者及び委託先　塩尻市教育委員会
8. その他　地元負担額(市費) 25%　500,000円
   農政部局負担額　75%　1,500,000円

第2節　調査体制

団　　長　小松優一（塩尻市教育長）
担 当 者　鳥羽嘉彦（日本考古学協会員・市教委）
調 査 員　小林康男（日本考古学協会員・市教委）
　　市川二三夫（長野県考古学会員）
参 加 者　赤津道子　小沢甲子郎　小松幸美　小松義丸　小松静子　清水年男
　　高橋鳥億　高橋阿や子　高橋タケ子　中野やすみ　藤松謙一　松下おもと
　　小松礼子　山口仲司　小松貞文　田中源三郎　手塚きくへ　中野元弘

一ノ瀬　文　中村ふき子　古厩馨子

事務局	市教委総合文化センター所長	寺沢　隆
	〃　文化教養担当課長	横山哲宣
	〃　文化教養担当副主幹	大和清志
	〃　平出遺跡考古博物館長	小林康男
	〃　平出遺跡考古博物館学芸員	鳥羽嘉彦
協力者	県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区実行委員会	
	〃　委員長	平林実己
	〃　副委員長・工区長	市川得二
	〃　畑かん部会長	川上徳治
	〃　農道部会長	中野弘樹
	〃　用地補償部会長	平林金男
	〃　畑かん部会副部会長	平林達郎
	〃　農道部会副部会長	塩原勝仁
	〃　用地補償部会副部会長	川上　豊
	〃　畑かん部会員	大野田恒治
	〃　〃	市川信利
	〃　〃	川上金吾
	〃　農道部会員	平林秀一
	〃　〃	大野田四郎
	〃　〃	平林正雄
	〃　用地補償部会員	塩原良美
	〃　〃	平林一夫
	〃　〃	上野広市
隣接地権者	大野田四郎　大野田力雄　大野田　重　上野博道	

第3節　調査日誌

○平成2年10月16日（火）快晴　小林博物館長より挨拶、鳥羽調査担当より経過報告、留意事項の説明の後、作業に入る。テント設営、道の草苅り、器材整備を行う一方、発掘区域を確認し、発掘区を設定する。発掘区は東端を基点に西へ5mずつ32区設定し、総延長160mのトレンチとなる。盛り土置き場をトレンチ内に確保するため、とびとびに区画を掘り始める。1・2・3・8・9・13・14・15・16・19・20・26・27区掘り下げ。

○10月17日（水）快晴　掘り下げ継続。3区で住居址らしい落ち込みを検出。土師器片多い。8.9区、ほぼローム面まで下げる。14区、縄文の石器が多く出土。

○10月18日（木）快晴　1区で高さ30cmの東壁が検出されるが西壁が見あたらない。3区、住居址掘り下げる。8区、住居址になる。遺物の他に炭化材の出土が多い。予想以上に土量が出たため、土の置き場に困る。14区、石囲炉のようなものが検出されたが、住居址らしくはない。慎重に覆土を掘り下げる。15区、擂鉢状の落ち込み検出。セクションから攪乱によるものと思われる。19・20区遺構なし。写真撮影、土層測図、埋め戻し。26・27区遺構なし。今日は9月下旬の陽気で20℃を超える。

○10月19日（金）晴　3区の住居址をH－125とする。東側で床面を検出する。8区の住居址をH－124とする。床面に多量の炭化材が出土し、焼失家屋と判断する。16区完掘する。遺構なし。25・31．32区掘り下げ。

○10月20日（土）晴　H－125 掘り下げ。やはり焼失家屋で、床面に多量の炭化材が出土する。H－124 床面検出。31．32区完掘、写真撮影。

○10月21日（日）　定休日。

○10月22日（月）晴　H－124、北壁を検出。炭化材出土状態測図。15・16・19・20・25・26・27・31・32区埋め戻し。14区、人骨が出土し、石囲は墓壙と断定。石囲の平面図測図。作業員の旅行等が多く、参加者が少なかった。

○10月23日（火）晴　H－125、床面を検出する。H－124床面精査。14区墓壙、人骨を検出し実測。17・18・21・22・23・24・28・29・30区掘り下げ。

○10月24日（水）晴　H－125、炭化材の写真撮影、出土状態図化。8・14区埋め戻し。17・18・21・22・23・24・28・29・30区掘り下げ。

○10月25日（木）曇　H－125 完掘、平面図測図、セクション図化。石製紡錘車2個出土。3・9区埋め戻し。17・18区完掘。写真撮影、土層測図。21・22区土層測図。23・24・28・29・30区掘り下げ。

○10月26日（金）曇　4～7・10～13・23・24・28～30区掘り下げ。

○10月27日（土）晴　4～7区掘り下げ。10区、土師器の甕片が多く住居址の可能性がある。区区、住居址を検出し、H－126 とする。23・24区完掘。28～30区掘り下げ。

○10月28日（日）　定休日。

○10月29日（月）晴　4～7区掘り下げ。10区、住居址の落ち込みを検出。H－127とする。H－126 掘り下げ。東壁下床面上より、こも石出土。29区、縄文土器2個体分が横倒しに潰れて出土。

○10月30日（火）雨天中止。

○10月31日（水）晴　4～7区掘り下げ。6・7区、南壁沿いに住居址らしい落ち込みを検出し、南側ぎりぎりまで拡張する。H－126 床面精査。ピット掘り下げ。西壁北寄りにカマド検出。H－127 床面精査。23・24区土層測図、写真撮影。29区、縄文土器を精査中、小型炉址を発見し、J－24とする。

○11月1日（木）晴　4・5区、小竪穴群（S－2～5）検出。平面図測図、写真撮影。6・7区の落ち込みをH－128 とする。平面図測図、写真撮影。H－126、127、平面図測図、写真撮影。セ

クション図化。J－24、床面精査、土器写真、壁検出。10・23・24区埋め戻し。
○11月2日（金）晴　J－24完掘、平面図測図、セクション図化、写真撮影。4～7・23・24・28～30区埋め戻し。器材片付け、撤収。

整理作業は11月～3年1月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、注記、復元作業、実測図作成、作成図面の整理、製図・図版作成を行う。報告書の原稿執筆も併行して実施する。

第4節　遺跡の状況と面積

遺跡名	場　所	現況	種類	最底調査予定面積	調査面積	発掘経費
平出	塩尻市大字宗賀315番4先	集落址	道路	450㎡	456㎡	2,000,000円

第1表　発掘調査経過表

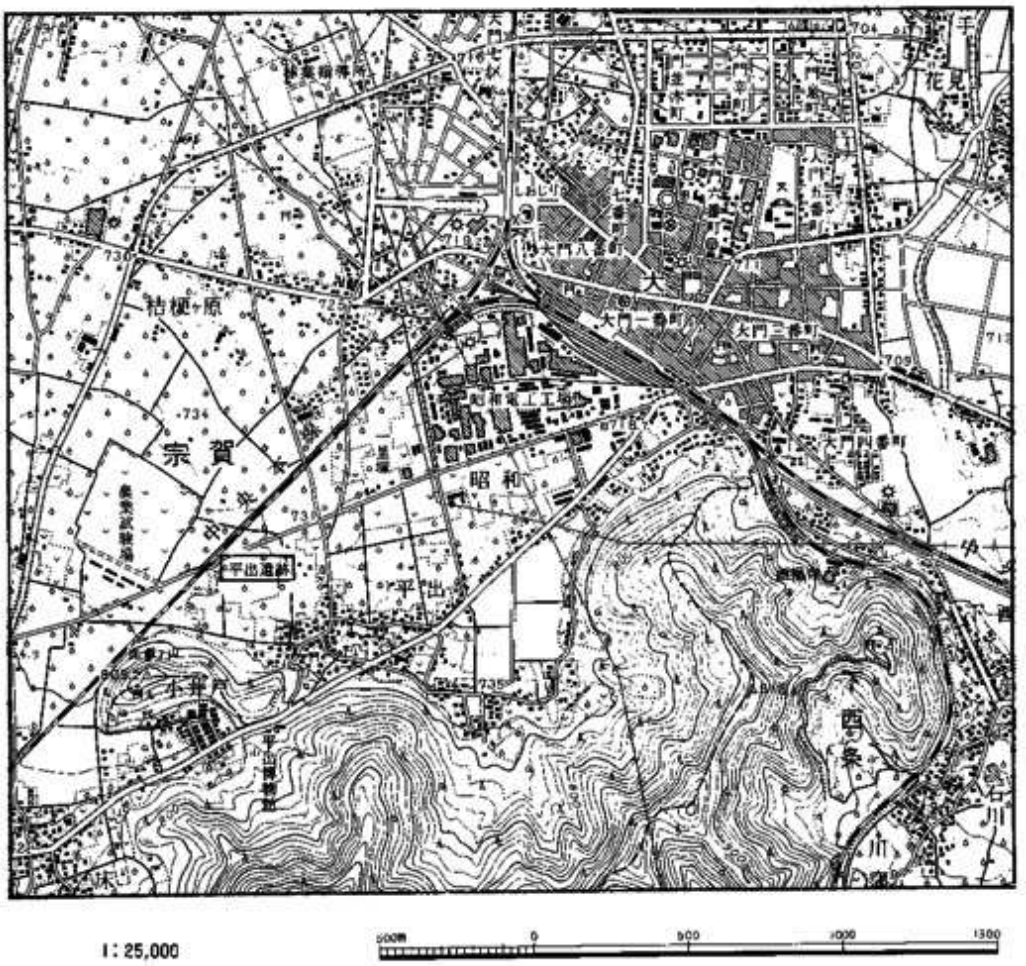
遺跡名＼月	10	11	12～1	検出遺構	主な出土遺物
平出	16　2	遺物整理 図面作成 原稿執筆		縄文時代中期住居址 1 古墳時代住居址 5 小竪穴 5 墓壙 1	縄文時代 土器・石器 古墳時代 土師器・須恵器

第II章　調 査 結 果

第1節　発掘調査場所

平出遺跡は、塩尻市大字宗賀平出に所在する(第1図)。ここは松本平の最南端に位置し、木曽谷から流れ出る奈良井川によって形成された隆起扇状地上に占地する。遺跡は現在の博物館との間にある比叡ノ山東麓の平出の泉から流出する渋川に沿って東西1km、南北 400mの広範囲に展開しており、昭和27年にこの内の15haが国史跡として指定された。

今回の調査区域は遺跡の西部に東西に延びる農道部分(160m)で、指定地とは隣接している。指定地側の延長部分については、昭和61年に同事業関連で発掘調査が実施されており（史跡平出遺跡－1987)、15・29・30トレンチがこれに該当する。



第1図　平出遺跡位置図

海抜は調査区の西端で738m、東端で736m、東へ向かった微傾斜地で、遺跡の範囲では最も高所にある。

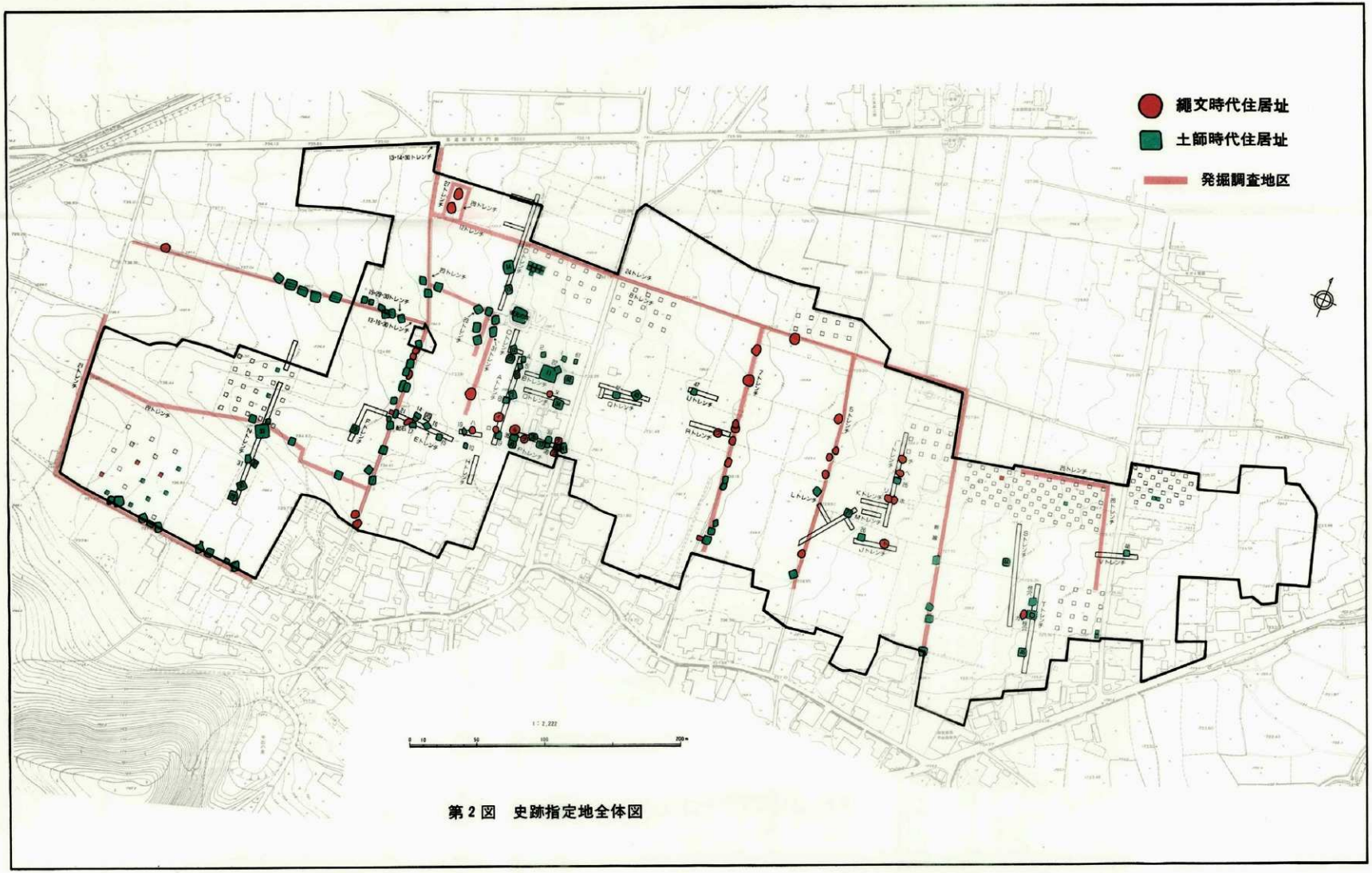
第2節　調査概要

今回の発掘調査は、平成2年度県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区に伴う農道整備に先行して、昭和61年にやはり同事業に伴い実施された発掘調査の15・29・30トレンチの西隣り160m、456㎡にわたって実施された。ここは平出遺跡の北西隅にあたる箇所であり、国史跡指定地からは外れている。調査区域は、東西に延びる農道のうち、東端の15・29・30トレンチに隣接する箇所を1区（1区画5m）とし、これより西に向かって32区まで設定した。

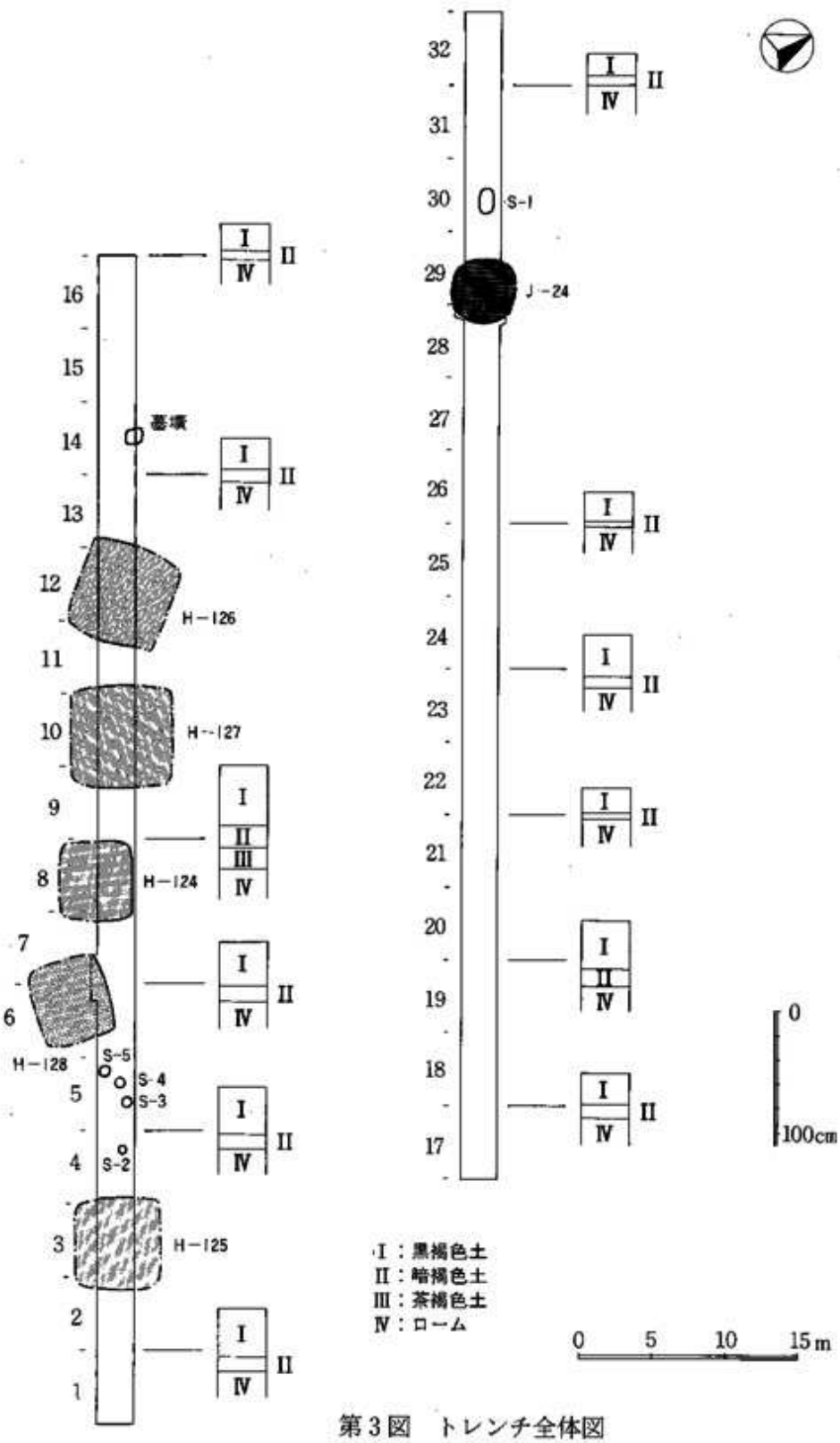
調査によって検出された遺構は、縄文時代中期の住居址1軒（J－24）、古墳時代の住居址5軒（H－124・125・126・127・128）、小竪穴5基、墓壙1基である。出土遺物は遺構に反映して、調査区の東側（1～13区）では土師器、須恵器、灰釉陶器が主で、若干の黒曜石片、凹石、たたき石が出土しているのに対し、西側（14～32区）では、反対に縄文中期土器、打製石斧、石鏃、たたき石、黒曜石片が目立ち、土師器の量は東側に比べ減少する。なお住居址内の遺物として、ミニチュア土器（J－24）、石製紡錘車（H－125）、こも石（H－126）の出土が特筆される。

各区において検出された遺構は次のとおりである。

2区～4区	H－125
4　区	S－2
5　区	S－3、S－4、S－5
6区、7区	H－128
7区～9区	H－124
9区～11区	H－127
11区～13区	H－126
14　区	墓壙（人骨を伴う）
28区、29区	J－24
30区	S－1



第２図　史跡指定地全体図


32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
S-1
J-24
墓壙
H-126
H-127
H-124
H-128
H-125
S-5
S-4
S-3
S-2
I
II
III
IV
I：黒褐色土
II：暗褐色土
III：茶褐色土
IV：ローム
0
100cm
0 5 10 15m

第3図　トレンチ全体図

第3節　遺構と遺物

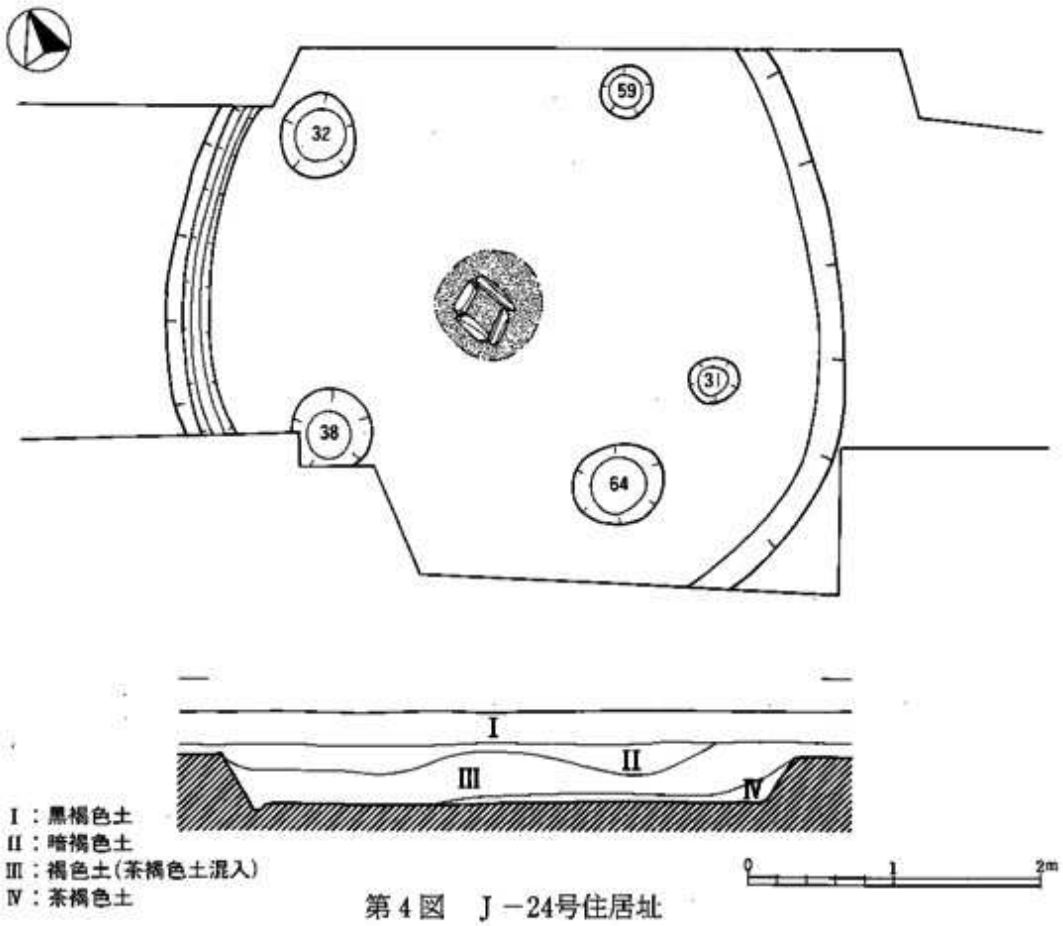
(1)　J－24号住居址

28・29区にかけて検出され、住居址のほぼ真ん中がトレンチにかかったため、北・南壁こそ検出できなかったが、東・西壁と床面の大部分を確認することができた(第4図)。

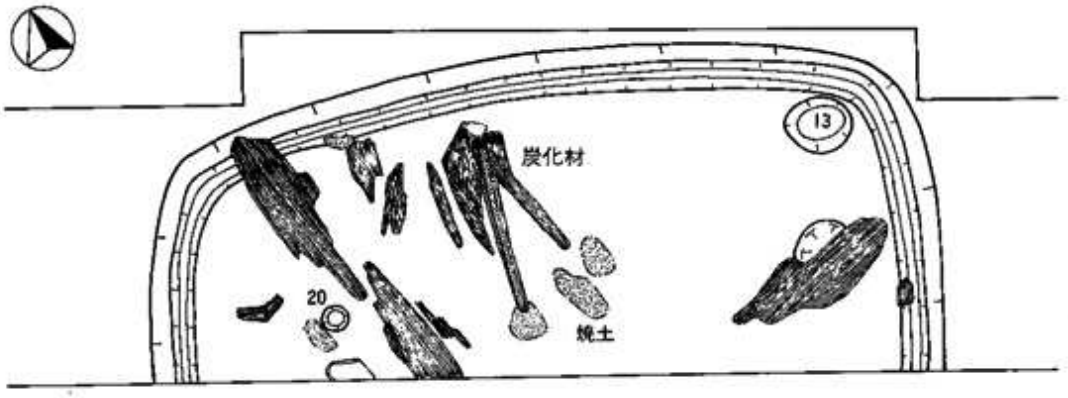
検出された壁から推測して、プランは円形の平面形態を呈し、規模は東西 440cmを測る。掘り込みはほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は東壁23cm、西壁36cmを測る。西壁下には幅18cm、深さ6cmの周溝がめぐっている。床は概して平坦であるが、壁沿いは僅かに高くなっている。ピットは5基穿たれており、深さが31～64cmと深く、柱穴として申し分ない。うち南東縁にあるピットには覆土に多量の焼土・炭を含んでいた。住居址中央には、僅かな掘り込みをもって石囲炉を設けている。炉は細長い板状の礫を4個、囲むように立てて構築しているが、礫は焼けてなく、また覆土に焼土・炭等もほとんど混入していないところから、長期の使用を窺えない。

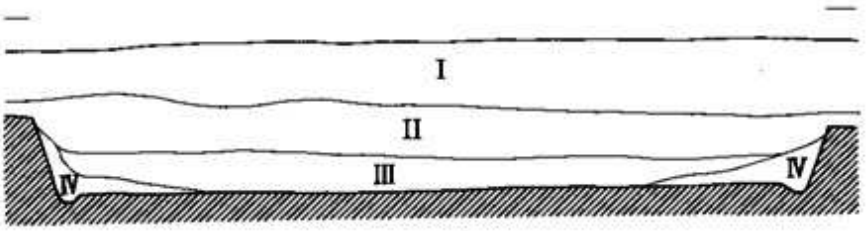
地表からは検出面が東壁で41cm、西壁で26cm、床面までは69cmの深さを測る。

遺物には縄文土器が多く出土した。1は口径54.8、器高67.1cmを測る大形深鉢で、口縁部に刺突文、胴部に隆帯をめぐらせ、他は指頭圧痕を残す。2も大形深鉢で、隆帯に囲まれた楕円区画



第4図　J－24号住居址





I：黒褐色土　II：暗褐色土
III：茶褐色土　IV：褐色土

第5図　H－124号住居址

内を斜位の沈線で満たしている。3・6は、平出3A。石器には、石鏃(1・2)、打製石斧(3～5)がある。

時期は、縄文中期狢沢期に属する。

(2)　H－124号住居址

7・8区にかけて検出され、住居址の北半部を確認できた。東西540cmの規模で隅丸方形の平面形態を呈する。壁はほぼ垂直にきれいに掘り込まれており、壁高は東壁38cm、北壁52cm、西壁は54cmを測る。壁下には周溝が設けられており、幅16cm、深さ5～7cmと大型のものである。床はよく踏み固められた堅緻な面をなしており、全体的には水平であるが、若干起伏がみられる。ピットは3基あり、西側のものは柱穴的な性格を有するが、東側の2基は浅くて擂鉢形のものである。本址の床面上には図示されるように、夥しい量の炭化材と焼土が検出された。このうち炭火材は茅のような細い繊維の集合体から成り、北西隅では床から壁にかけてもたれる状態で出土した。おそらく屋根材が焼け落ちたものと思われ、焼失家屋であることが窺える。

地表からの深さは、検出面で東壁60cm、西壁46cm、床面で100cmを測る。

遺物は、土師器坏を中心に小片が多く出土したが、図化できるものはなかった。出土した坏は全面にミガキを有する古墳時代に属するものであり、住居の時期も古墳時代末に比定されよう。

(3) H－125号住居址

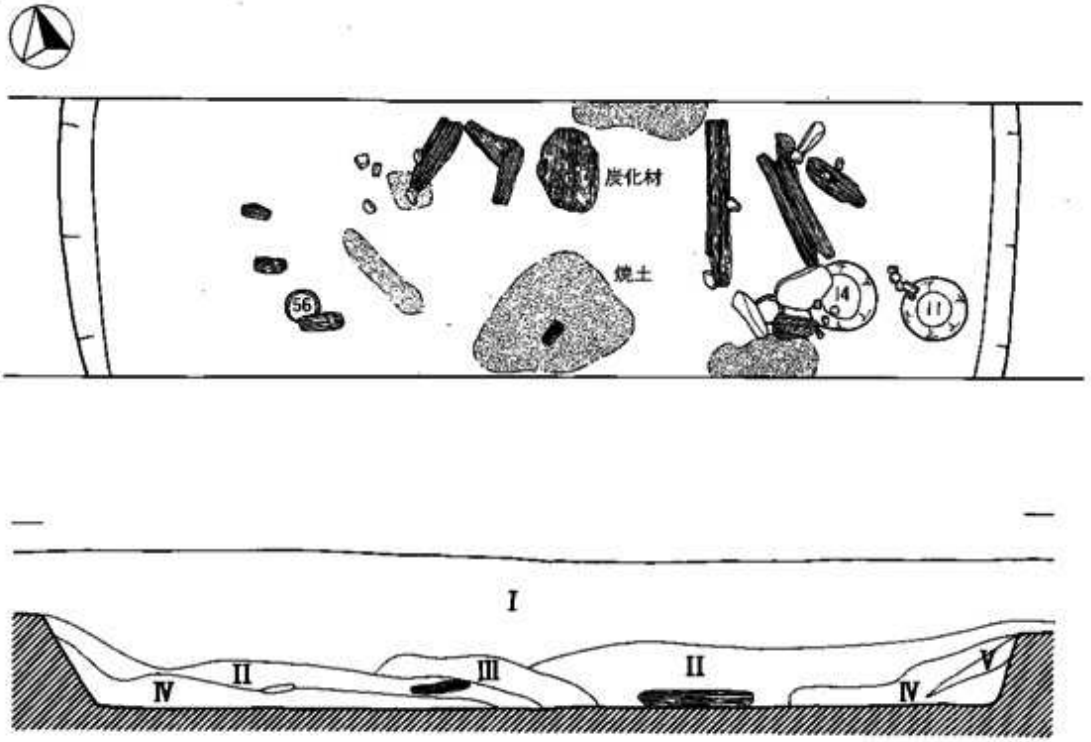
2～4区にかけて検出され、ちょうど住居址の真ん中がトレンチにかかっている(第6図)。覆土を掘り下げていく段階で、すでに大量の炭が出土していたが、床面直上には夥しい量の炭化材と焼土が散在しており、このうち炭化材の最大径は18cmをも測る太いものであった。やはりH－124号と同様、焼失家屋であろう。

住居址の規模は東西 650cmを測り、壁の在り方より推して方形もしくは隅丸方形の平面形態を呈すると考えられる。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、東壁46cm、西壁48cmと深い掘り込みになっているが周溝はない。床は水平でよく踏み固められ遺存状態は良い。柱穴は東西に1基ずつ検出され、深さがそれぞれ56cmと77cmあり細くて深い。東壁から 140cm内側に扁平の大円礫が3個出土しているが、おそらく台石等に用いたものと思われる。

地表からは検出面が東壁で52cm、西壁で43cm、床面までは101cmを測る。

遺物は土師器坏(8～10)が得られ、石製品に紡錘車2点がある。坏8・9は内外とも横位にミガキを施し、内部を黒色処理している。10は内外ともナデ調整を行っている。紡錘車13は完形品、14は半欠品で、半欠後、貫通はしていないが一孔を穿っている。

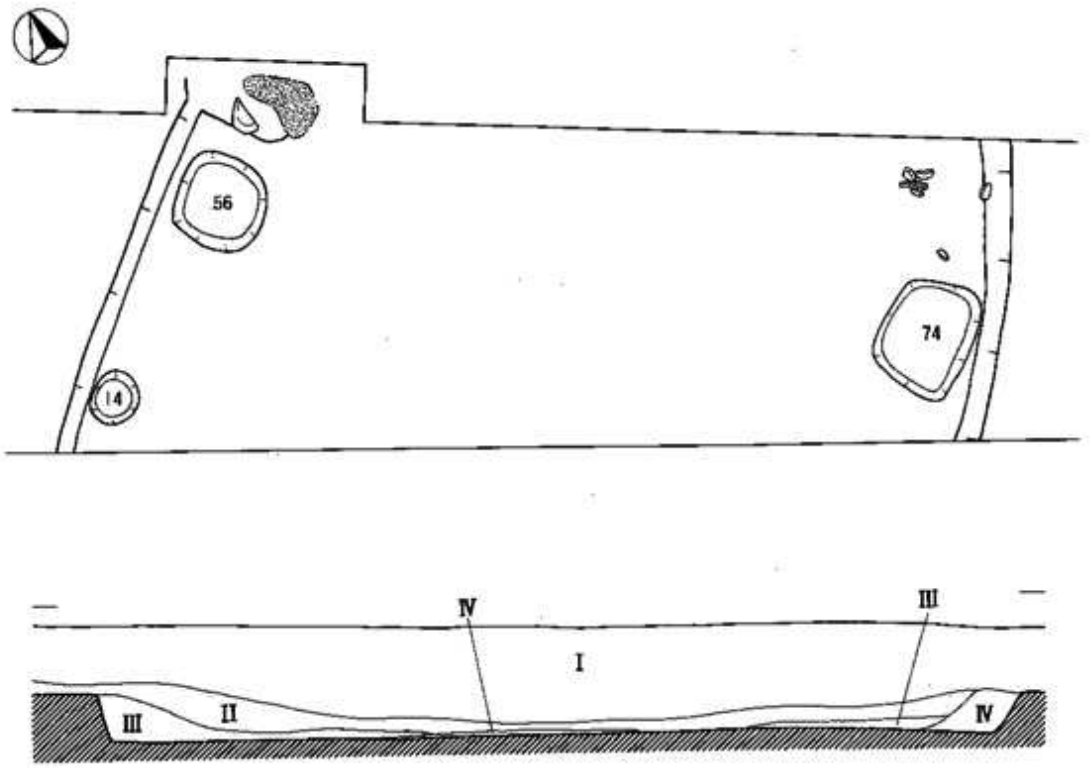
時期は古墳時代後期。



I：黒褐色土　II：暗褐色土　III：褐色土(暗褐色土混入)
IV：褐色土(暗褐色土、焼土混入)　V：黒色土

0　1　2m

第6図　H－125号住居址



第7図　H－126号住居址

(4)　H－126号住居址

11～13区から検出され、住居址のほぼ中央をやや斜めに横切るようにトレンチがかかっている(第7図)。規模は東西 680cmを測り、プランは壁の在り方がやや不規則なことから不明である。壁はほぼ垂直にきれいに掘られており、壁高は東壁25cm、西壁26cmを測る。周溝はない。床面は壁沿いが良好に残っており、堅緻な面をなしているが、中央部は軟かい。ピットは両壁沿いにみられ、形態から推測すると柱穴というより貯蔵穴と思われる。なお東壁沿いの北寄り床面から、こも石が6個セットで出土した。カマドは西壁北寄りの道路幅クイにかかる位置から発見された。石組みの粘土カマドで、うち1個は石皿を転用している。内部に厚い焼土が堆積していた。

地表からは検出面が東壁で50cm、西壁で54cm、床面までは88cmを測る。

遺物は、土師器坏 (11・12・14・15)、高坏 (16)、小形甕 (17～20)、甕 (21)、須恵器坏 (13) が出土し、編物用石錘 (6～12)も得られている。坏 (11・12) は黒色処理がなされている。小形甕はナデ整形。蓋は天井部中央をヘラケズリ、外周部をロクロナデし、つまみは付けられていない。甕は巻き上げ痕が残り、内外ともナデられている。編物用石錘は1ヶ所にまとまって出土したもので、(9)は砥石としても用いられている。

時期は古墳時代後期末である。

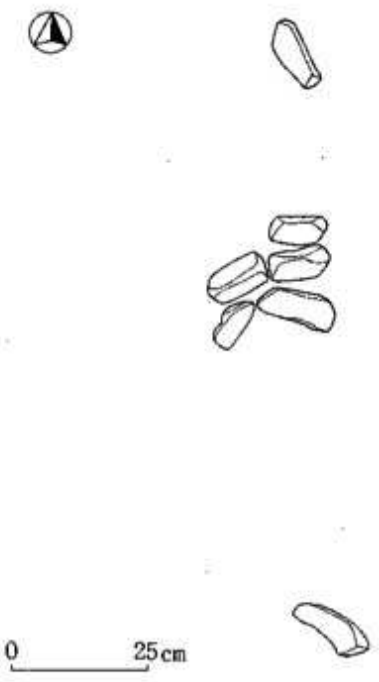
(5) H－127号住居址

9～11区に検出され、住居址のほぼ中央がトレンチにかかっている(第9図)。東西710cmと今回の調査区から検出された住居址としては最大の規模であり、プランは方形もしくは隅丸方形を呈すると考えられる。壁はほぼ垂直にきれいに掘り込まれており、壁高は東壁46cm、西壁52cmと高い。周溝はない。床面は水平でよく踏み固められている。ピットは3基あり、いずれも大形で深い。東側のピットから東壁にかけて、幅32cm、深さ12cmの溝が走るが性格は不明である。

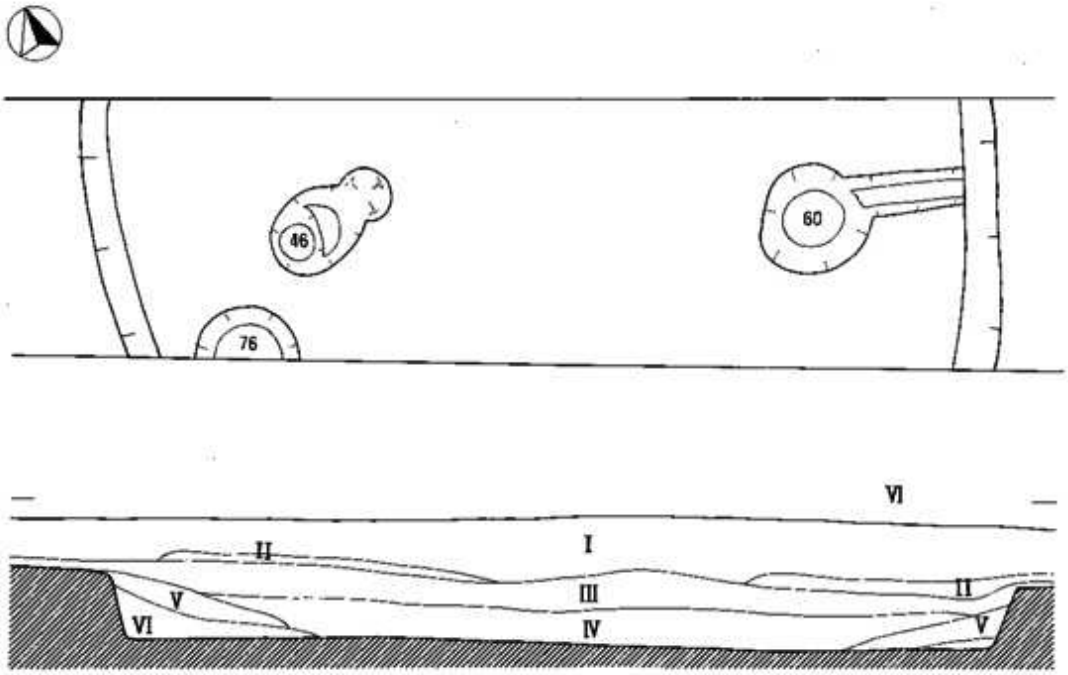
地表からは検出面が東壁で56cm、西壁で44cm、床面までは96cmを測る。

遺物は、土師器坏(22)、小形甕(23)がある。坏は底面ヘラケズリ、黒色処理のもの。小形甕は工具によるナデ整形がなされている。

古墳時代後期末と思われる。



第8図 編物用石錘出土状態



I：黒褐色土　II：暗褐色土　III：黒色土
IV：茶褐色土　V：褐色土(黒色土混入)
VI：黒色土

第9図　H－127号住居址

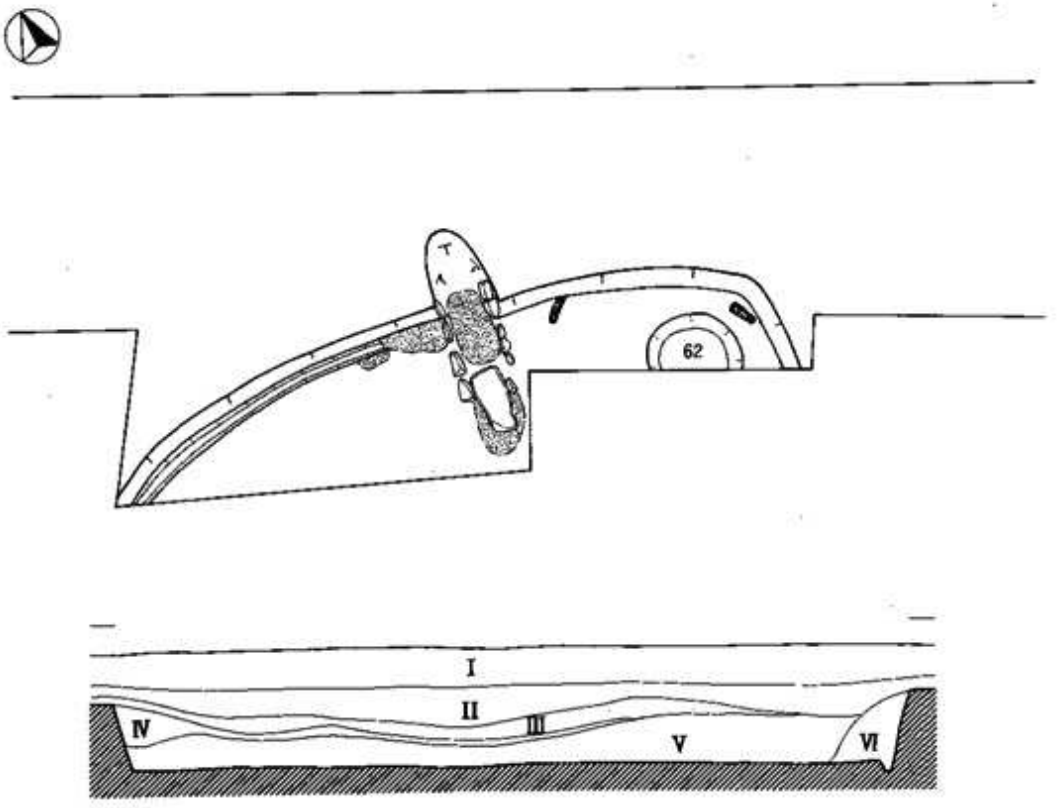
(6) H－128号住居址

6・7区から検出され、当初トレンチ南縁に住居址の北壁が一部検出されたため、ブドウ棚支柱を避けて最大限 140cm南側へ拡張した(第8図)。床面上には多量の焼土・炭が散在しており、隣接するH－124号、H－125号住居址と同様、焼失家屋であることが推察される。北壁と東壁の一部が確認されたのみで住居址の規模は不明であるが、壁の在り方より推して隅丸方形の平面形態を呈すると思われる。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、東壁で52cm、北壁で56cmの壁高を有する。周溝は北壁西半部沿いにめぐっているが、幅10cm、深さ4cmと小型のものである。床面は水平で、良く踏み固められ遺存状態はよい。カマドは石組み粘土カマドで、北壁中央にあり、保存状態も非常によい。

地表からは検出面で40cm、床面までは92cmを測る。

(7) 1号小竪穴

30区から検出された。140×98cmの楕円を呈し、深さ35cm、主軸方向はN－80°－Wを指す。底面は平坦で、タライ状の断面を呈する。遺物の出土はない。



I：黒褐色土　II：暗褐色土　III：黒色土　IV：褐色土(黒色土混入)
V：茶褐色土(褐色土、炭混入)　VI：茶褐色土

第10図　H－128号住居址

(8) 2号小竪穴

4区にあり、80×70cmの楕円形を呈する。主軸方向はN－5°－Eを指し、深さは43cm。掘り込みはほぼ垂直で、底面はわずか丸底となっている。

(9) 3号小竪穴

5区にあり、北側が一部壁下へ潜っている。径80cmの円形を呈する。垂直にきれいに掘り込まれており、底は平坦で堅い。深さは38cm。

(10) 4号小竪穴

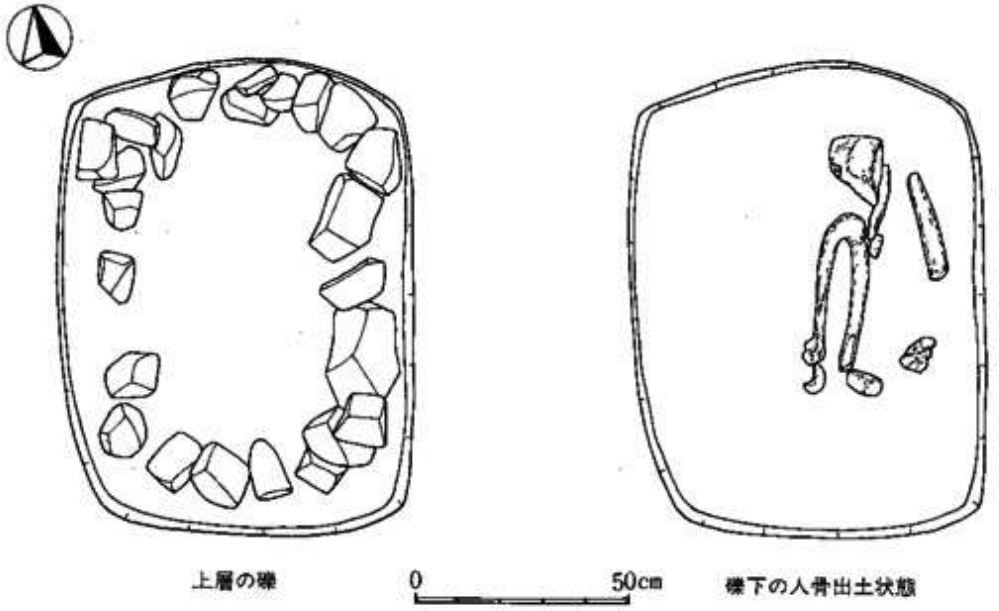
3号の西側約80cmのところにある。78×72cmのほぼ円形を呈し、深さは58cm。掘り込みはほぼ垂直で底は平坦である。

(11) 5号小竪穴

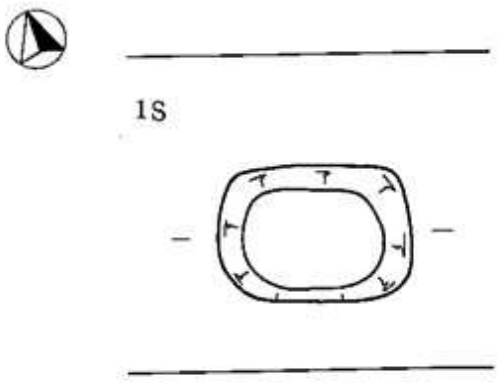
4号の南隣りにあり、北半部のみの検出となった。径76cmの円形を呈すると思われ、深さは78cmと深い。掘り込みはやや傾斜を示すが、きれいに立ち上がっている。

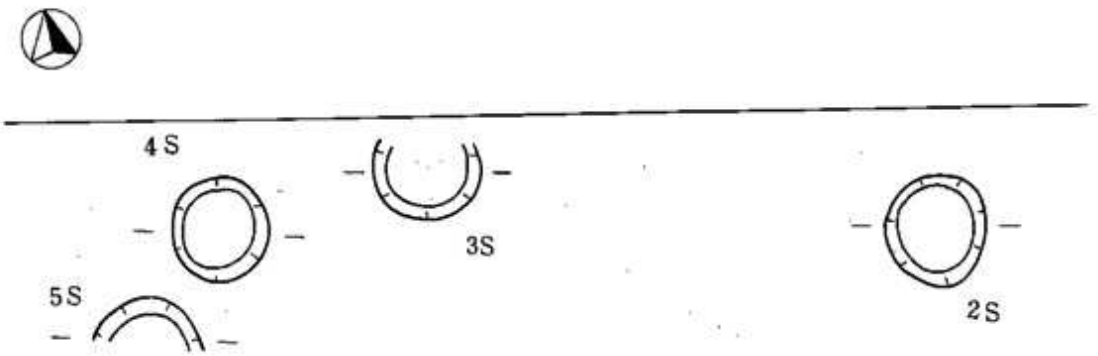
(12) 墓　　壙

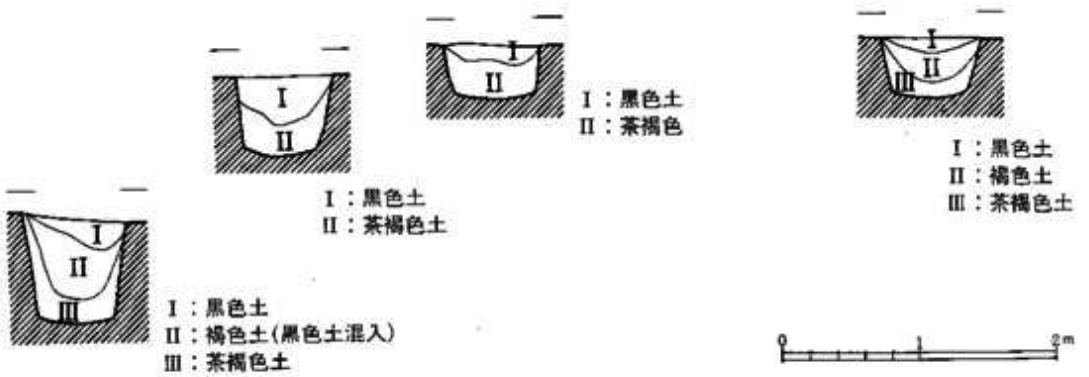
14区のほぼ中央、北側の道路幅ぎりぎりに検出された。形態は110×83cmの長方形を呈し、底面は107×79cmで、ほぼ垂直の掘り込みとなっている。主軸方向は南北を指し、深さは 37cm。壁に沿って10～20cm大の角礫を一重にめぐらし、東側の礫を剝いだ直下に人骨が検出された。礫が多



第12図　14区墓壙


1S
II III IV
I
I：黒褐色土
II：暗褐色土
III：黒褐色土(ローム粒混入)
IV：褐色土(暗褐色土混入)
0 1 2m


4S
3S
5S
2S

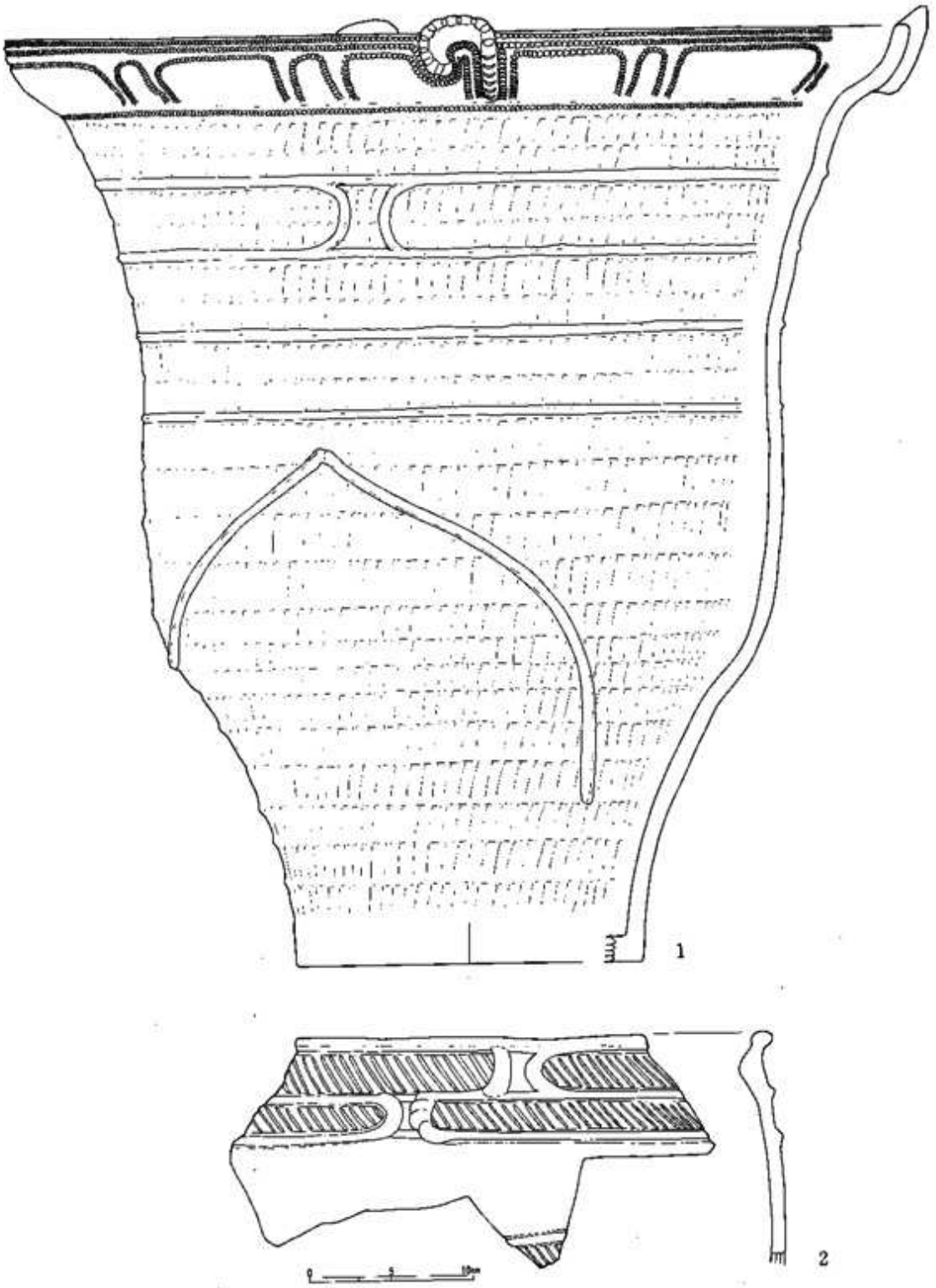

I
II
I：黒色土
II：茶褐色土
I
II
I：黒色土
II：茶褐色
I
II
III
I：黒色土
II：褐色土(黒色土混入)
III：茶褐色土
I
II
III
I：黒色土
II：褐色土
III：茶褐色土
0 1 2m

第11図　小　竪　穴

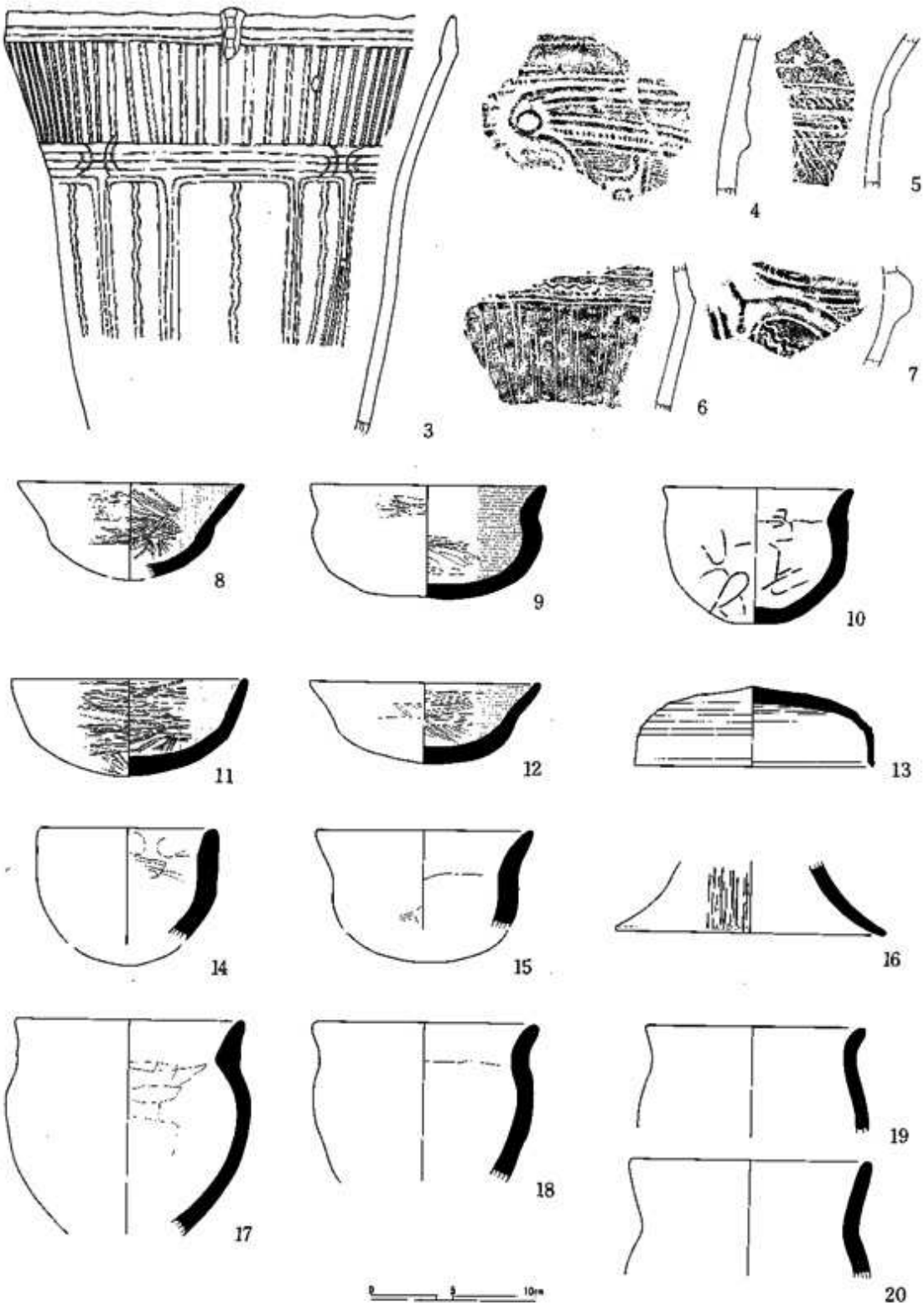
少、火を受けているところから火葬墓と思われる。人骨は土壙の東半部に埋葬され、頭部を北に向け、顔は西方を向き、手足を強く折り曲げた横臥座屈葬の状態であった。なお顔が下を向いているところから、埋葬時に頭が壁に当たり下に折り曲げたことが推測される。副葬品の出土はなかったが、出土状態から中近世の墓壙と思われる。

第2表　土器観察表

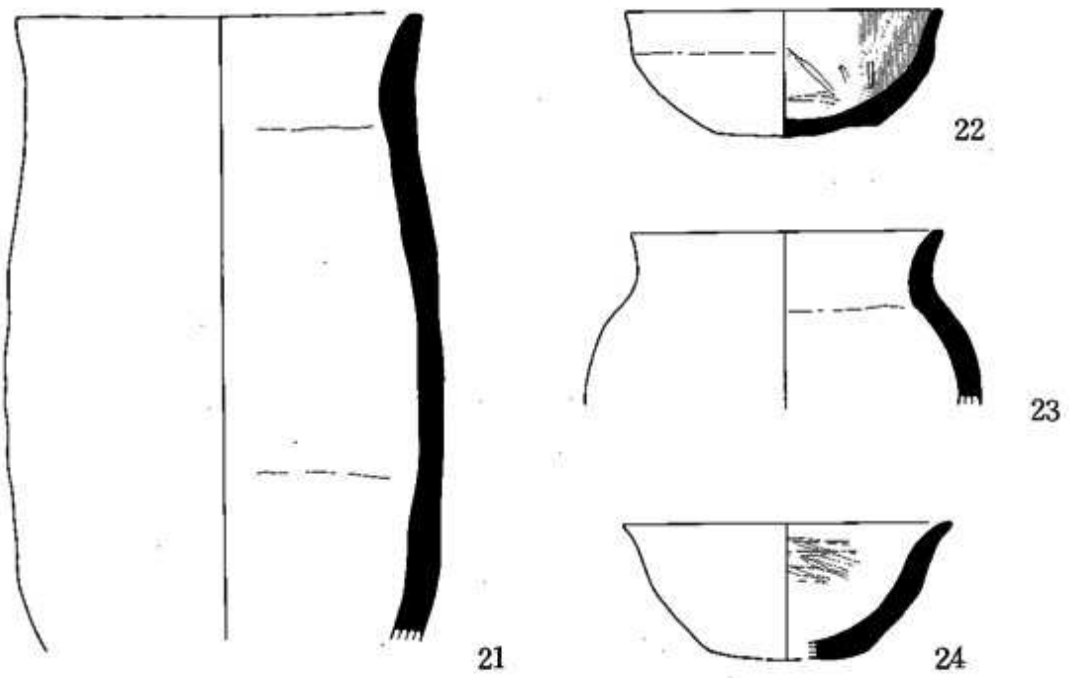
出土地点	図番号	種別	器種	法径(cm) 口径	底径	器高	色調 内	色調 外	焼成	成形・調整・形態の特徴	備考
J-24	1	縄文	深鉢	54.8	21	67.1	茶褐色	茶褐色	良	ナデ、指圧整形、隆帯、刺突文	
	2	〃	〃	—	—	—	〃	〃	〃	隆帯　沈線文	
	3	〃	〃	27.2	—	—	〃	〃	〃		平出3A
	4	〃	〃	—	—	—	〃	〃	〃		
	5	〃	〃	—	—	—	〃	〃	〃		
	6	〃	〃	—	—	—	〃	〃	〃		平出3A
	7	〃	〃	—	—	—	〃	〃	〃		
H-125	8	土師器	坏	13.7	—	5.9	黒	赤褐色	良	ミガキ　黒色処理	
	9	〃	〃	14.2		6.8	黒	〃	〃	ミガキ　黒色処理	
	10	〃	〃	11.5	—	8.2	暗褐色	暗褐色	〃	ナデ	
H-126	11	土師器	坏	14.2	—	5.9	黒	赤褐色	良	ミガキ　黒色処理	
	12	〃	〃	14.0	—	5	黒	〃	不良	ミガキ　黒色処理	
	13	須恵器	盌	14.4	—	4.9	青灰色	青灰色	良	ロクロナデ　ヘラケズリ	
	14	土師器	坏	10.7	—	—	暗褐色	暗褐色	不良	ナデ	
	15	〃	〃	13.2	—	—	〃	〃	良	ナデ	
	16	〃	高坏	—	16.5	—	赤褐色	赤褐色	〃	ミガキ　ナデ	
	17	〃	小形甕	13.7	—	—	〃	〃	〃	ナデ	
	18	〃	〃	13.7	—	—	〃	〃	〃	ナデ	
	19	〃	〃	13.3	—	—	〃	〃	稍良	ナデ	
	20	〃	〃	14.6	—	—	〃	〃	良	ナデ	
	21	〃	甕	16.4	—	—	〃	〃	〃	ナデ	
H-127	22	土師器	坏	13.1	5.4	5.1	内黒	暗褐色	良	ナデ　黒色処理　底面ヘラケズリ	
	23	〃	小形甕	12.1		—	暗褐色	暗褐色	〃	ナデ	
S-2	24	土師器	坏	13.4	—	—	赤褐色	赤褐色	良	ミガキ	



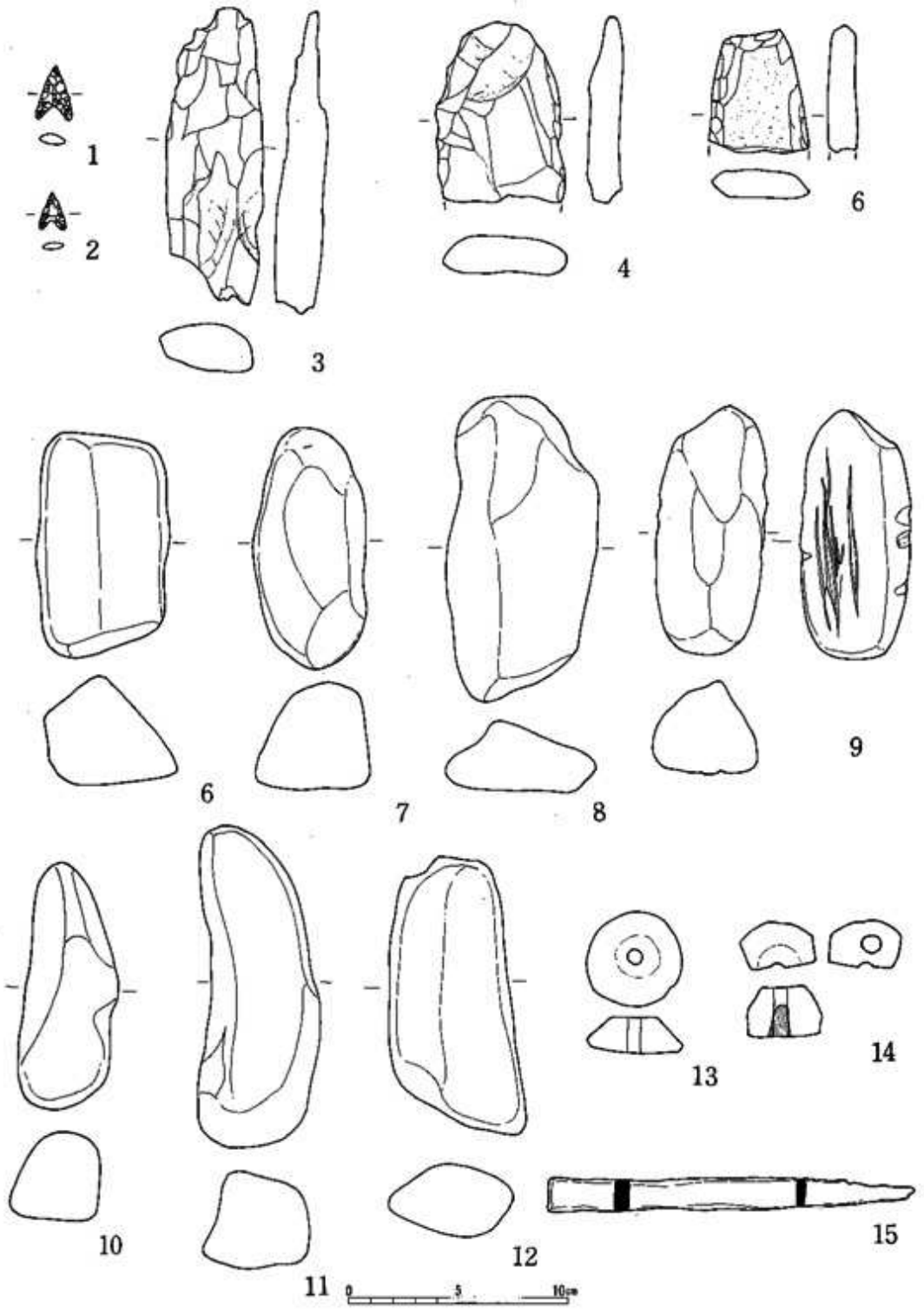
第13図　平出遺跡出土土器(1)



第14図　平出遺跡出土土器(2)



第15図　平出遺跡出土土器(3)



第16図　平出遺跡出土石器・鉄器

第Ⅲ章　ま　と　め

平出遺跡は過去に於いて何回かにわたって発掘調査が実施され、縄文時代から平安時代にかけての大集落址であることが判明し、昭和27年には国史跡に指定された。指定範囲は東西1㎞、南北 300～400mにわたる15haである。今回の発掘地区は指定地区外であるが、指定地の西側に隣接した道路部分である。

調査区域周辺は、道路の東側延長部分が昭和61年に15・29・30トレンチが入れられ、また南側には昭和20年代のNトレンチと昭和56年のグリッドがそれぞれ入れられ、幾つかの遺構が検出されている。そこで従来の調査結果を参考にしながら今回の調査地区の遺跡内における位置、検出遺構の意義について考えてみたい。

今回の調査では縄文時代のJ－24号が調査区の西端で検出され、また縄文遺物も調査区の西半域（14～31区）に集中し、東半域では2・3・8区でわずかに凹石、敲石、黒曜石片が出土したにとどまった。これまでの調査結果によると、平出遺跡の縄文集落は約 130m東方の地がおよそ集落の西縁とされていたことから、今回の検出は予想外の成果となった。縄文集落も古墳～平安時代の大集落に引けをとらない広範囲な集落であることが確認された。

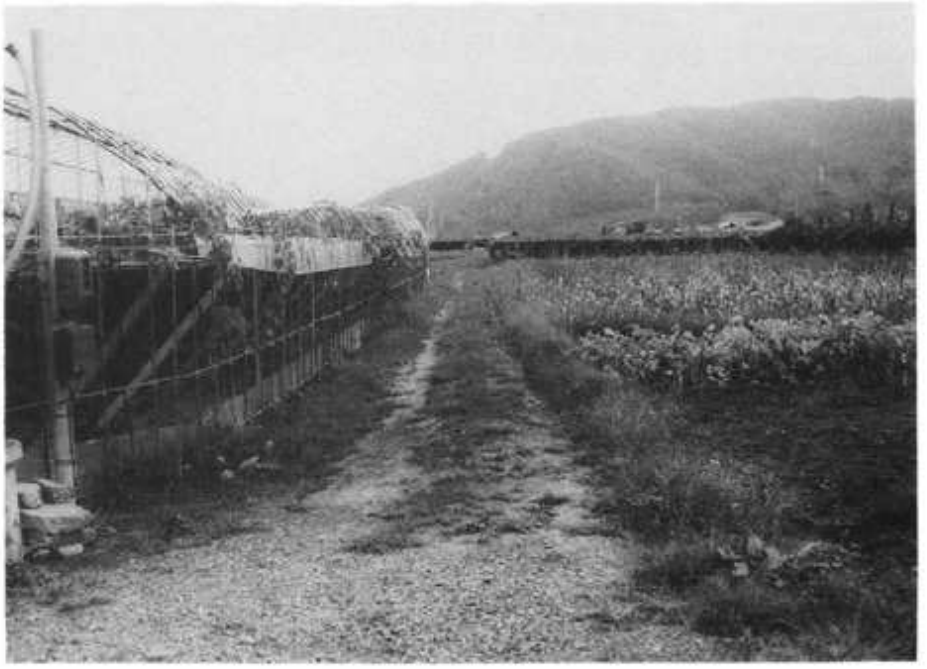
古墳時代の住居址は調査区東半域の2～13区にかけて、すべて単独であるが殆んど距離を置かずに5軒が検出された。該期の住居址の存在は東側の15・29・30トレンチの発掘成果からある程度予測されたが、まだかなりの密度で分布していることには驚かされた。遺物出土においては西端の32区まであり、該期の集落が更に西へ延びていることが明らかにされた。

このように今回の調査は、調査箇所が当初は遺跡の周縁地とみられていたが、その予想に反して更に西側へ集落が拡大していくことを示唆するものであった。今回の発掘成果を含めて、これまでに検出された遺構の数は縄文時代住居址47軒、古墳～平安時代住居址 128軒、平安時代建物址4棟となった。

最後に、今回の発掘調査に関しては地元の関係役員・近隣地権者の方々に深い御理解と御援助をいただき、末筆ながら厚く感謝申し上げます。

図　版　1

発掘地点遠景（比叡ノ山から）



発　掘　前（西側から）

図 版 2

調 査 開 始 式

トレンチ掘り下げ（H－126号・127号付近）

図 版 3

J－24号住居址土器出土状態

H－124号住居址

図 版 4

H－125号住居址

14 区 墓 壙

「平　出　遺　跡」

平成2年度県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

平成3年3月13日　印刷
平成3年3月15日　発行

発行　塩尻市教育委員会
印刷　㈱英巧堂印刷所

平出遺跡

堺市教育委員会